

3 日本本土空襲



ホーネット艦上のドゥーリットルと艦長のミッチャー*

ドゥーリットルが手にしているのは日本政府が授与した紀元二六〇〇年記念式典賞。爆弾に取り付けて投下しました。



30 昭和十七年四月十八日米国飛行機来る岡山市立中央図書館所蔵・画像提供
岡山の郷土史家・渡辺知水がドゥーリットル空襲の新聞記事を集めたスクラップ帳



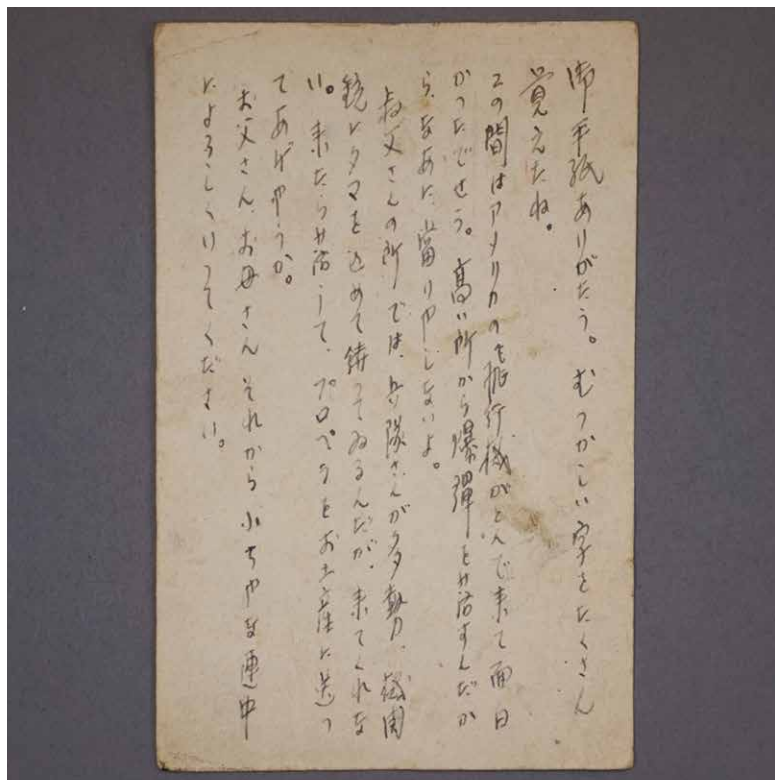
32 M 54 焼夷弾 山本達也所蔵・画像データ提供
M 54 焼夷弾にはテルミットという燃焼材が詰められており、高温で約1分燃焼するものでした。「昭和十七年四月十八日米機神戸空襲ノ際降下セシ焼夷弾残骸」と記入されており、神戸に投下されたものと思われます。

日本本土初空襲 ドゥーリットル空襲

真珠湾攻撃以来日本軍の優勢が続く中、米軍は日本本土空襲を行いました。日本への心理的な影響を与えることと自国の戦意高揚が目的でした。当時の米軍基地から日本に到達できる爆撃機が無い中、なるべく日本本土に近づけた航空母艦上から陸上爆撃機B25で空襲後、中国大陸への離脱を目指すというものでした。16機のB25を率いたドゥーリットル中佐の名からドゥーリットル空襲と呼ばれます。

1942年(昭和17)4月18日午前7時20分、ホーネットから発艦した16機のうち、東京近辺に14機、名古屋と神戸にそれぞれ1機が侵入しました。各機はM54焼夷弾を128発束ねた集束焼夷弾か500ポンド通常爆弾のどちらか、あるいは両方を搭載しており、投下と機銃掃射を行いました。これにより死者約90名、重軽傷者約450名、全焼・全壊した家屋112棟(180戸)、半壊51棟(104戸)という被害がありました。日本は米軍による空襲を全く想定しておらず、衝撃を受けるとともに一般市民が犠牲になったことは大きく報道され、アメリカへの敵対心を高めることとなりました。

ドゥーリットル隊はソ連に不時着した1機以外は中国大陸へ向かい、また、全機が損壊しました。そして8名の搭乗員が日本の捕虜となり、後に軍事裁判により、一般市民を攻撃したことを理由に3名が上海で銃殺刑となりました。



31 上林道雄あて村田武四郎葉書 1942年(昭和17)4月27日(消印) 個人所蔵
朝鮮第24部隊村田隊より出されたもの。慰問の手紙への礼とドゥーリットル空襲について「この間はアメリカの飛行機がとんで来て面白かったでせう。高い所から爆弾を落とすんだから、なかに、当たりやしないよ。」「来たら落してプロペラをお土産に送ってあげやうか。」などと書かれています。



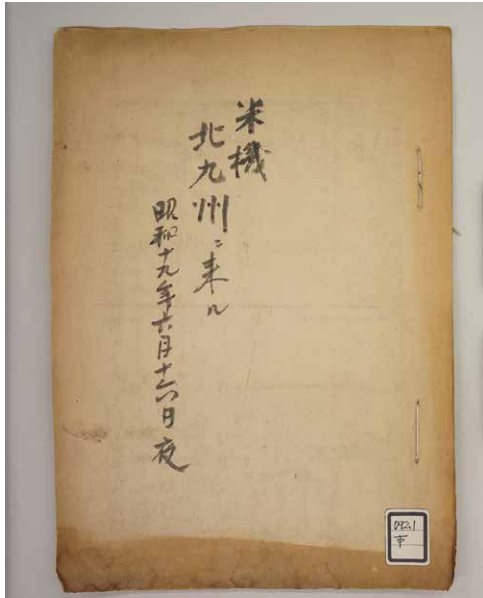
B29の生産風景*

超長距離爆撃機 B 29 の開発と日本本土空襲

米陸軍省が行動半径 2000 マイル (約 3200km) を超える重爆撃機の試作許可を出したのは 1939 年 (昭和 14)12 月でした。1941 年 (昭和 16)5 月には試作機の完成前にもかかわらず、B29 の開発が出来次第 250 機を納品する契約をボーイング社と結びます。B29 が完成し、実戦配備された 1943 年 (昭和 18) には対日戦のみに使用されることが決定し、翌年 4 月にはインドと中国に配備されました。

この時点ではインドのカラグプールから中国の成都付近の前進基地に飛び、そこから日本本土を攻撃するという非効率的な方法しかとれず九州北部と満州までしか到達できないと考えられていました。1944 年 (昭和 19)6 月 15 日の八幡製鉄所空襲をはじめ、北九州への空襲は 9 月まで数度行われましたが、そのうちの 1 機が岡山県下初の空襲となった 1944 年 (昭和 19)8 月 11 日真庭市蒜山への空襲を行ったことが最近わかりました。

*積載する重量によりますが、B29 の航続距離は約 5000 ~ 7000km、4 ~ 9 トンもの爆弾を搭載でき、1 万 m を超える高度で航行できました。



33 「米機北九州二来ル 昭和十九年六月十六日夜」郷土史家、渡辺知水の八幡空襲に関する新聞記事のスクラップ帳。



八幡製鉄所を空襲する B29 1944 年 (昭和 19) 8 月 20 日*



八幡製鉄所の模型を使って B29 のクルーに爆撃航程を説明する教官*

マリアナ諸島の B29 による日本空襲

B29 による 6 月 15 日の八幡空襲は、米海兵隊のサイパン上陸日にあわせたものでもありました。日本本土を本格的に爆撃するためにマリアナ諸島を確保する必要があった米軍は 1944 年 (昭和 19)6 月から激しい攻撃を始め、8 月までにはサイパン、ティニアン、グアムの 3 島の日本の守備軍はほぼ全滅しました。米軍は占領直後から基地の整備を始め、サイパンのアイズリー飛行場に B29 の一番機が到着したのは 10 月 12 日でした。その後も飛行場が整備され、最終的にマリアナ諸島には 5 つの B29 の航空団が配備されます。

こうして北海道など一部を除いた日本本土ほぼ全域に B29 は到達可能となりました。11 月 1 日、サイパンから 1 機の B29 が東京上空にあらわれました。以来連日のように写真偵察を目的とした B29 が日本上空に現れ、日本軍の高射砲は届かず、迎撃機も到達が難しい高高度から空中写真を撮影していきました。こうして得られた写真はマリアナの基地で現像され、場所を特定し、攻撃の目標となる地域をカバーするよう、合成されました。得られた情報をもとに、最初に攻撃されたのは東京の中島飛行機武蔵製作所で 1944 年 (昭和 19) 11 月 24 日のことでした。



カメラ (K-18) からフィルムパックを取り外すところ。フィルムサイズは 450 × 230mm*



空襲目標地域を覆うことのできる解像度の良い写真を合成しているところ*



東京空襲のためにサイパンのアイズリー飛行場で離陸を待つ B29。ほぼ 1 分置きに離陸した*

都市への焼夷空襲

マリアナ諸島の B29 部隊は当初、日本の攻撃の届かない高度 1 万 m 以上の高空から軍需工場等を目標に通常爆弾で攻撃しました。しかし高高度からの爆撃は精度が低く、ほとんど成果をあげることができませんでした。

こうした中、市街地に焼夷空襲をという声もありました。ルーズヴェルト大統領がたちあげた科学者を中心とした国防研究委員会の一部門では 1941 年（昭和 16）から焼夷弾の開発が始まっており、1943 年（昭和 18）3 月には日本の 20 都市を焼夷攻撃するために必要な焼夷弾量を計算した『日本 - 焼夷攻撃資料 - 』という文書が出されました。中心人物だったイーウェル博士は焼夷空襲の先行研究がなされていたイギリスで学び、帰国後、アメリカのダグウェイやエグリンでの焼夷弾開発実験の成果も加えて研究を発展させ、日本への焼夷空襲を軍上層部に強く働きかけます。

B29 部隊に日本に対する焼夷攻撃を実行させることには、慎重論もあったものの、1944 年（昭和 19）10 月 14 日には陸軍航空軍最高司令官のアーノルドが日本の都市に対する焼夷空襲の研究を命じ、1945 年（昭和 20）になると、名古屋（1 月 3 日）、神戸（2 月 4 日）、東京（2 月 25 日）の市街地に試験的な空襲が行われました。これにより充分なデータを得て、市街地への焼夷空襲が本格化していきます。

* 1 NDRC National Defence Committee * 2 Raymond H.Ewell



ダグウェイ実験場に建設された日本家屋 米議会図書館所蔵



ダグウェイ実験場、室内の焼夷弾の火災発生能力の実験*



3月10日の東京空襲の爆撃中心点と半径 1.2kmの円*



3月10日午前10時35分、空襲直後の東京*



6月5日神戸市街地に投下される M47 焼夷弾*

焼夷電撃作戦 大都市空襲から中小都市空襲へ

4 月 1 日に予定されていた沖縄戦の 22 日前、3 月 10 日から 19 日にかけて、東京・名古屋・大阪・神戸の大都市に 5 回の大規模な空襲が行われました。約 10 万人の人命を奪った東京への空襲を皮切りとしたこの一連の作戦は焼夷電撃作戦と呼ばれ、マリアナの B29 部隊の最大戦力を投じた激しいもので、焼夷弾の備蓄がなくなるほどでした。補給がすんだのち、マリアナの B29 部隊は次に 5 月 14 日から 6 月 15 日まで東京・川崎・横浜・名古屋・大阪・神戸・尼崎の 7 つの大都市に大規模な焼夷空襲を行います。この攻撃で大都市を破壊しつくと判断したのちは、中小都市が対象となりました。

6 月 15 日以降、マリアナの 4 つの航空団は天候の良い場合は昼間に高高度から通常爆弾を使用した爆撃を、悪天候の場合には夜間、それぞれの航空団が一つの都市を担当して焼夷空襲を行うこととしました。こうして、終戦までに一晩に 4 つから 6 つの中小都市が空襲されていくこととなります。8 月 15 日までに原爆で破壊された広島と長崎を加えると全国で 66 の都市が空襲によって破壊されました。

このほかに B29 部隊による沖縄上陸作戦支援のための空襲、瀬戸内海の航行を阻害するための機雷敷設、石油施設への攻撃などがあり、また 7 月以降は日本近海に近づいた米英海軍の艦船からの艦砲射撃や艦載機による空襲が終戦の日までありました。岡山のような地方都市であっても、常に危険を感じる日常だったのではないのでしょうか。

都市空襲に使用された焼夷弾

焼夷空襲は、制御が不可能なほどの大火災を起こし、それによって都市を破壊するという考え方に基づいて実行されました。このために使用されたのが焼夷弾です。内容物は種類によって異なりますが、日本空襲でよく使用された M47、M69 と M74 には添加物に加え、粘度を高めた粗製ガソリンが主に詰められていました。

日本の都市空襲で使用された焼夷弾は大型の M47 焼夷弾と M69、M74 などの小型の焼夷弾との組み合わせがほとんどでした。大型の M47 は中心に TNT 火薬の詰まった炸薬筒が入っており、鉄の弾筒が裂け散るほどの大きな爆発と火災を引き起こします。これは消防設備や消火担当者が存在しても消火が困難なほどの火災を起こすためと、後続の爆撃目標とするための 2 つの目的がありました。



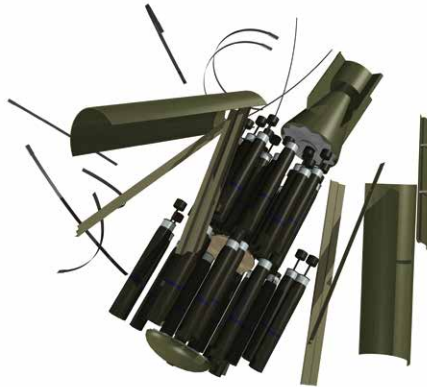
51 M47 焼夷弾

弾頭信管まで含めると 120cm 近い長さのある大型の焼夷弾です。先行する B29 が投下しました。大きな爆発が起きるため、周囲の人を殺傷し初期消火を難しくし、また後続機が投弾する際の目印となりました。

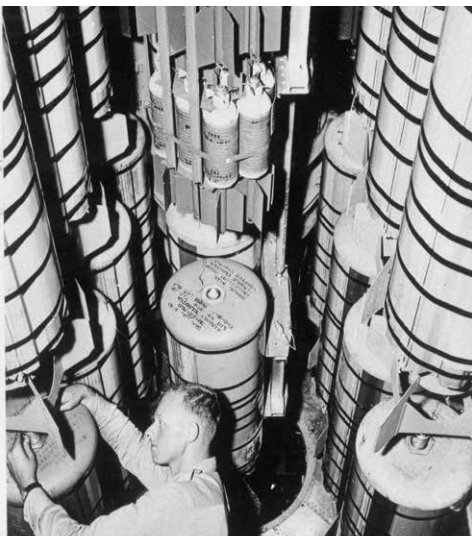


B29 の爆弾倉内の M47 焼夷弾*

6 発が一组になって懸架されています。1 機に最大 184 発積むことが出来ました。

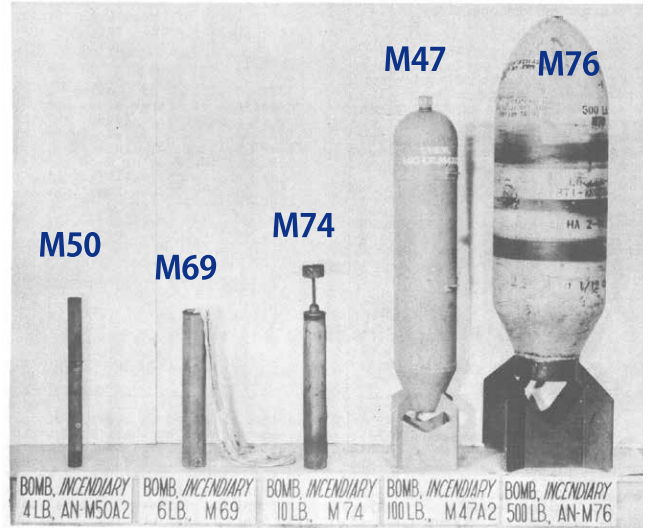


M74 焼夷弾を集束した E48 焼夷弾の解束予想図 CG 提供 星貴
尾部にとりつけられた信管により、地上から 1500 m 程度上空で解束します。



M18 集束焼夷弾と破碎集束弾*

M69 焼夷弾を束ねた M18 焼夷弾と 20 ポンド破片爆弾 (M41) を集束した T4E4 破碎集束弾。破碎弾は人を殺傷し、消火を妨げることが目的でした。



焼夷弾の大きさの比較 (一部加筆)
工藤洋三提供 米空軍資料室所蔵



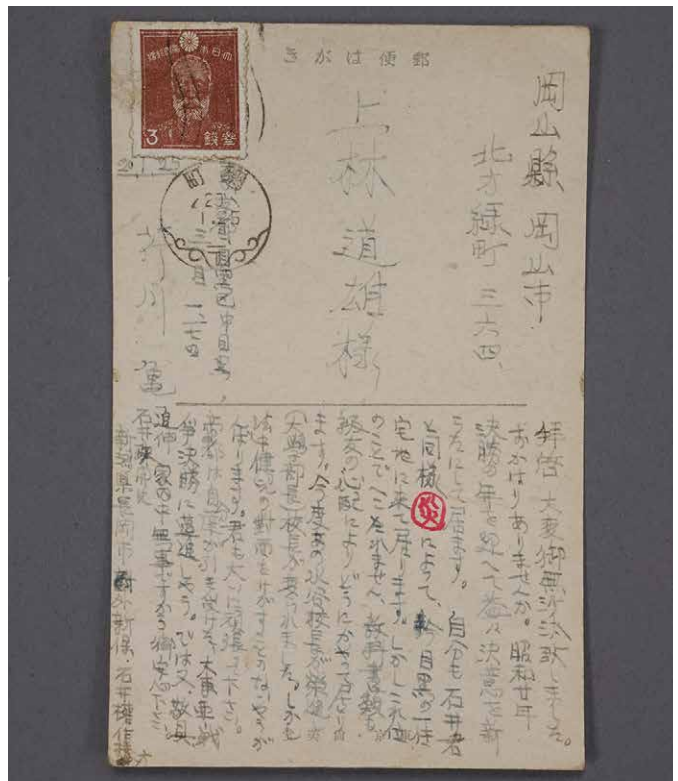
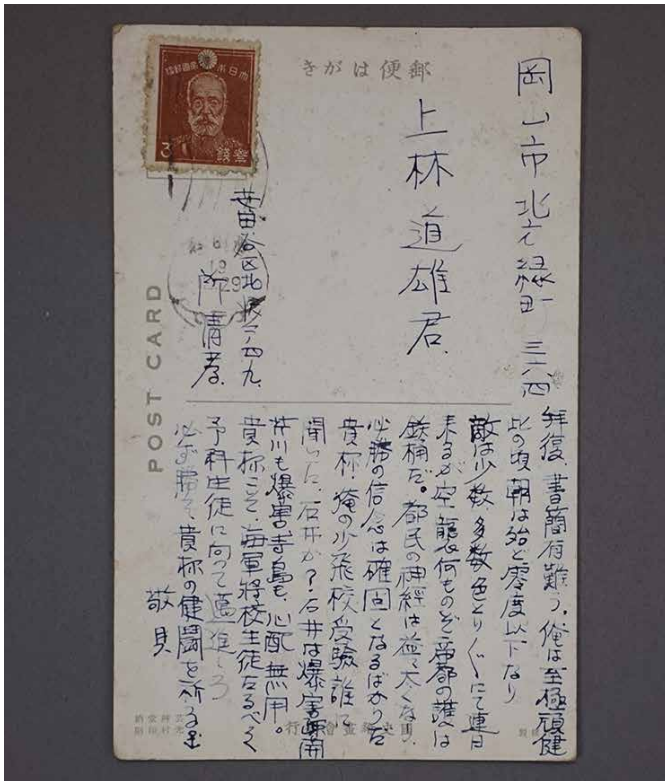
左から 40 M50 焼夷弾 (AN-M50A2、弾体のみ)
41 M69 焼夷弾
43 ~ 47 M74 焼夷弾の弾筒と部品
40・41 は山本達也所蔵・画像データ提供



42 M145 信管
山本達也所蔵・画像データ提供
集束焼夷弾 M18 などの弾頭につけられます。羽の回転数によって安全を解除し、目的の高度で爆発します。



48 20 ポンド破片爆弾 (AN-M41A1)
山本達也所蔵・画像データ提供



34 上林道雄あて所清孝葉書 1944年(昭和19)12月29日消印 個人所蔵
岡山へ疎開した友人に東京の中学生が書いたもの。「敵は少数、多数色とりどりにて連日来るが空襲何ものぞ帝都の護は鉄桶だ。」「石井は爆害疎開 芹川も爆害、寺島も。心配無用」と連日東京に空襲があると書かれています。

35 上林道雄あて芹川亀葉書 1945年(昭和20)1月25日付 個人所蔵
岡山へ疎開した友人に東京の中学生が書いたもの。「自分も石井君と同様(33)によって、今日黒の一住宅地に来て居ります。」と空襲によって疎開したことを伝えています。



37 玉野空襲の爆撃により傷ついたレコード収納用箆箱
玉野市和田の社宅にあったものです。1945年(昭和20)4月8日の空襲により、爆弾の破片による大きな傷がついています。同じ部屋には家族が就寝しており、乳児の面倒を見るために起きていた母親が首と指に大けがをしました。



1945年(昭和20)6月22日、水島空襲の様子
工藤洋三提供 米国国立公文書館所蔵
写真左下に爆撃による爆煙が立ち上っています。

岡山県下への空襲

岡山県下への初めての空襲は1944年(昭和19)8月11日の真庭市蒜山下長田へのものでした。翌年3月から4月にかけては、B29単機による小規模な空襲が9件ありました。これはレーダースコープ撮影任務(B29内のレーダースクリーンの画像を撮影するもの。3月6日、29日、4月8日)と気象観測攻撃任務(気象観測と攻撃を行うもの。3月2日、4月12日、13日、19日、20日)という2種類の任務に伴うもので、航行と投弾訓練を兼ねたものでした。

6月22日には倉敷市水島の三菱重工業倉敷航空機製作所に対して、第314航空団108機が500ポンド通常爆弾を使い攻撃しました。昼間の通常爆弾を使用した空襲だったので、岡山市街地でもB29の機影がはっきりと見え、爆発による振動が伝わってきたといいます。

その1週間後、6月29日午前2時43分から4時7分、マリアナの第58航空団が岡山市街地に夜間の焼夷空襲を行いました。岡山市街地が焼き尽くされたこの攻撃は、第3回目の地方中小都市空襲で、同じ夜に佐世保と延岡と門司も焼かれました。

そして、7月24日には米国艦隊と英国艦隊の空母から飛び立った艦載機が市街地を空襲しました。体験談でよく語られているのは機銃掃射で、朝の通勤時間帯の汽車などが狙われ、山陽本線沿いの駅、玉柏や東岡山駅での惨状が伝えられています。

また、終戦日近くには倉敷空襲の計画も立てられていました。もう数日終戦が遅ければ倉敷の街も焼かれていたかもしれません。